

## 事態への関わりを表す with 句

河本 誠

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科  
(2006年10月2日受付、2006年11月6日受理)

### 概要

What's wrong with you?

象は鼻が長い。

などの with を伴った英文とそれに対応する日本語は、筆者には構造が極めて類似していると思われ、この類似性を探ることを目標に、他の類似の文とともに構文の構造、意味の比較を行った。その結果、英語においては、この種の文型に2つの制約があることが判明した。1つは語順からくるもので、“象”のように全体の提示なしには、その部分である鼻について先に記述することが難しいという点(日英語の部分・全体制約)。もう1つは、what のような疑問詞や不定代名詞などを文中の名詞と入れ換えようとする、入れ換えができる元の文構造に制限が課せられるということ(英語の疑問詞・不定代名詞制約)。また、この考察の過程で、with の意味として個と事態とを結びつける用法があるという認識に到達することができた。これらのことから、What's wrong with you?型の文型は、やはり“特異な”文型であるという結論が得られる。

### [1] 問題提起

次のような with の文は筆者がこれまでずっと気になってきたものである。

#### Type1 とタイプ1

- (1) a. What's wrong with you?  
b. どうしたのですか、まずいことでもありましたか。
- (2) a. Something is wrong with the machine.  
b. 機械はどこか(に)故障がある。
- (3) a. Is everything OK with him?  
b. 彼は、すべて OK ですか。

このグループの英文を Type1 と呼ぶことにする。それらの訳では、with you、with the machine、with him がそれぞれ「あなたは」、「この機械は」、「彼は」の日本語と対応する。その意味で、この日英語の文は構造の違いがあるにも関わらず、類似性のほうが筆者には気になってきた。日本語訳では、「あなたは」、「機械は」、「彼は」などは、これらの文のトピックを表し、残りがそれについての陳述であると考えられることができる。そうすると、これらの英文は、対応する日本語とトピック、陳述という区切り方に関して、同じであるといえる。ただ、「あなたは」、「機械は」、「彼は」に対応する with you、with the machine、with him の部分が英文では文末に来ていて日本語訳での文頭位置と反対になっている。これらの文での日本語の「は」の機能と、それらに対応する with を伴った英文を比較することにより、with を伴った上記のような英文の特徴づけ(構文の意味分析)を行うことをこの拙論の目的とする。

### [2] 日本語の「は」

前章の日本語訳「機械はどこか故障がある」型の文をまず先に考察することにする。この型を中心とした文での「は」の用法について以下のように分類できる。

タイプ1 (4) 象は鼻が長い。(象は鼻の部分が長い)

タイプ2 (5) 象は鼻が長い。(象に関して言えば、鼻が長い)

(6) 私は弟がいます。

(7) あの店はカレーが美味しい。

(8) 秋は果物が美味しい。

**タイプ3** (9) 象は長い鼻を持っている。

これら各タイプの特徴を見てみよう。

#### タイプ1 (全体・部分型)

「象は長い、鼻の点で」という意味で「象は鼻が長い」ということである。「象は」は文全体のトピックであると同時に「象は長い」ということも成立し、その成立が特に「鼻の点で」という構成になっていると考えることができる。主語の象についてこの一部分に着目して、その点がどうだと述べているわけである。この意味で、このタイプを全体・部分型と呼ぶことがふさわしい。次の Type2 との区別については、次章以降で述べることにする。

#### タイプ2 (トピック明示型)

例えば「彼は」は、文(3b)のトピックと呼ぶことがなんとかできようが、それが残りの「弟がいます」に対し、どのような機能を果たしているかを考えてみたい。「私は」は、「私に関して言えば」と言い換えることができるように、「弟がいます」という事態が関与するところの主体、対象を表している。「は」自体は、“取り立て”の機能を持っていると特徴付けられることはすでによく知られているが、それ以外の意味はなく、したがって、「私は」と「弟がいます」の2つは、取り上げられたトピックとそれについての陳述ということで結び付いているだけである。「は」は、その特別な語彙的意味によって、トピックと陳述を結び付けているわけではない。それは、次のように「は」のない形で言うことができることから理解できる。

(10) 私、弟がいます。

(11) あの店、カレーが美味しい。

筆者が日本語を母語としているせいかも知れないが、この形は文頭にトピックが来て、次にそれについての陳述が続く極めて自然な順であるといえる。

日本語は、英語に比べてトピックが明示されることが多いという特徴を持っていることは明らかである。すると、ある英文に対しその日本語訳を見れば、元の英文のトピック性の判定に間接的に利用できる可能性がある、と考えられる。その意味でも日英語で対応している文どうしの比較は意味があるといえるのではなからうか。

筆者など、日本語から英語への翻訳で、何か言い切れしていない、と感じることが多いのは、それは恐らく助詞「は」を中心としたトピック化や焦点化といった言語的明示化が英語では少ないことに起因していると考えている。例えば英文(2a)をその出現(提示)順に訳してみると、

(2) c. 何かおかしいぞ、その機械は。

となり、トピックと陳述の順序が日本語訳と異なっている。もし仮に(2b)の日本語訳の方が自然なトピック・陳述の順とすると、英文(2a)の方は、トピックを表す with 句が文末に来ていて不自然ということになる。同じようなことがたとえば次の(12b)の例でもいえる。

(12) a. 彼らは3人(組み)だった。

b. There were three of them.

c. They were three in total.

(12c)の文型も見られるが、(12b)の文型が非常に良く見られる。(12a),(12c)が自然な提示順であるとする、(12b)の文は自然なトピック提示が犠牲になっているといえる。文体的にこういった文が使われる状況はどんなものかを調べるが必要になるが、ここでは突発的な緊急の表現では、トピックが前置されている場合のほうが逆に不自然になることが容易に想像できる。そのようなときには、「どうだ」、「どうした」という部分が先(文頭)に来るのが自然であろう。

結局、日本語がトピック明示型の言語であるというのは、取り立て助詞「は」などによるトピック表示部分が、文副詞の形で文頭に置かれ、それが時間的進展において自然な提示順になっていて、しかもそういった文の割合が非常に多いということであろう。この文型では、日本語の取り立て助詞「は」は、文副詞的機能を果たしているに過ぎず、語彙的意味がないことが注目される。そのことが逆にその使用範囲を広げているとも考えられる。しかしながら、それは先に触れたように無標の場合の展開順である。このような意味でこの文型を文副詞型(トピック明示型)と呼ぶことが適切であろう。この文型では(8)の例文で見ると、「秋」と「果物」とがタイプ1のような全体・部分の関係になっていないことが別のタイプを設けた理由である。

#### タイプ3 (所有型)

(13) ? 象は長い鼻を持っている。

この種の文は文脈を取り去って単独で見ると日本語で使われることは少ないであろう(使用条件が英語より厳しい)。例えば主語が有生でなければならぬという条件が思いつく(\*「机は脚を4本持っている」)。主語が単に有生であればOKというわけでもないことは次の例で分かる。

(14) ? 私は弟を持っています。

ここで、「私」が自分の意思で所持するかどうかをコントロールできるようなものとして目的語の表す対象を持っているかどうか、ということが重要な条件になっていることが分かる。また、次のように複文の中では容認性が高くなるように思われる。

(15) 象は長い鼻を持っているので、それをさまざまな目的に利用できる。

しかしながら、やはりこの型は英語の have 文と比べ、使用頻度が圧倒的に低いことは否定できない。この文型を所有型と呼ぶことにする。

### [ 3 ] 英語の with

ここでは、1章で示したような with 句を含む英文やそれと類似した英文について見てみよう。

#### Type1 (文副詞性が強い場合)

1章での例文を再掲して考察してみよう。

(16) What is wrong with you?

(17) Something is wrong with the machine.

(18) Is everything OK with him?

これらの文では、with 句は文副詞的に働いていて、それを「～は」以外では日本語に対応させることが難しい(もちろん、「は」をさらに明示した「～に関して」のようなものは OK)。英語では明示のための“as for ～”が用意されていて、これらによって書き直すこともできるかもしれない。

(16)' As for you, what is wrong?

次の Type2 とは、文として外見上は同じであるが、Type2 では with 句の副詞性は弱く、動詞句を修飾している割合が高いと考えられる。したがって、文の中の with 句と主語との間には何か役割分担のようなものがありそうに感じられる。そのことについては次章で詳しく見ることにする。

#### Type2 (文副詞性が弱い場合)

(19) a. I am having trouble with my teeth.

b. 歯痛で弱っています。

(20) a. She's having trouble with her eldest son.

b. 長男のことで苦労している。

(「で」は助詞ニとテが接合してつづまったもの)

これらの文では、with 句の部分とその残りの前置部分が自然に区切られているようにも見える (Type1 と同じように) が with 句は動詞句、その中でも目的語と意味的に結びついていることが分かる。即ち、目的語が表す事態に関与する対象が with 句で示されている。したがって、with 句は Type1 と比べ文副詞性が弱く感じられ、動詞句を修飾していると見るべきであろう。日本語訳をしてみると、この場合 with が「は」に対応できないことが分かることから、上記 Type1 との違いがこの点でも伺える。Type1 とは動詞も異なっているが、やはり with 句は目的語と強く意味的に結合している。

trouble --- my teeth

trouble --- her eldest son

Type1 では、次のようになる。

What's wrong --- you

Something is wrong --- the machine

Everything is OK --- him

この Type2 で取り上げた例文は主語がすべて代名詞になっていることに気づくが、これが Type1 と大きく異なる点であることを次章で見ることになるが、以上の点が Type2 を Type1 と区別する判断基準になっている。その他の例を次に挙げておく。

(21) Do you have a problem with that? (Type2)

#### Type3 (所有型)

次の have を使った類似文を見てみよう。

(22) The elephant has a long nose.

これは、日本語訳(「象は長い鼻を持っている」)に比べ、英語では極めて頻繁に利用される文型であることに間違いは

ないが、この文型が多用される理由、必然性は次章で考えることにする。

#### Type4 (「象は鼻が長い」型)

「象は鼻が長い」に対応するような文として、次の文型も存在する。

(23) The elephant is long in its nose.

この日本語訳は次のようになり、これはタイプ1の日本語の例とぴったり一致すると言える。

(24) 象は鼻が長い。

即ち、これらの日本文、英文の文型は全く同じであると考えられる。この文型は英語でそれほど多用されないと筆者は考えていて、その理由を次章で示すことにする。In its nose が付加しない場合も、状況が整えば成立する。例えば、日英語共に、鼻が今話題になっているという文脈においては、The elephant is long(象は長い)だけでも可能であるが、これは正に意味論の領域でここでは深入りしないことになる。

#### [4] 比較分析

ここでは、前章での「象は鼻が長い」型に類似した日英文の分類を元に、それらを比較することにより、各文に潜む文型の意味を探っていくことにする。

次の2文を比較する。

(25) 象は鼻が長い。

(26) 鼻は象が長い。

すると、鼻が意味する(指し示す)対象の違いが分かってくる。前者では、ある象を任意に1つ取り上げれば、その象の鼻が長いという解釈であるが、後者では最初の「鼻は」という段階では象の鼻に限らない。そのことは次の文を見るとさらにはっきりする。

(27) 象はその鼻が長い。

(28) \*その鼻は象が長い。

(25)のように、日本語では初めにトピックの象が来て、それについて述べることになる陳述部分で鼻が来れば、トピックで指定された象が持っている鼻という解釈になるが、これは極めて自然な無標の順序といえる。英語でこれと同じ構成順を取ろうとすると、象を主語としてトピック的に切り出し、次のように言わざるを得なくなる(Type3)。

(29) The elephant has a long nose. (Type3)

(30) The elephant is long in its nose. (Type4)

(25)と同じような

(31) \* The elephant, its nose is long.

では英語としては成立しない。少し修正変更した

(32) As for the elephant, its nose is long.

は可能であろうが、あまり多くは使われない。それはType3のより簡単な構造で同じことが表せるので、その必要がないから、ということが1つの理由と言えないだろうか。ただ、(29)の nose は動詞 have により the elephant と結びつけられ、発想的には「象は鼻が長い」は(30)に近い。

このことが英語において、「象は鼻が長い」型に相当する文として have を使った文が多用される大きな理由と考えられる。それではなぜ、日本語では英文(29)の直訳である「象は長い鼻を持っている」型の文の使用範囲が狭いのだろうか。これについては筆者には合理的な説明が見当たらないが、後で少し触れることになる。まとめると、「象は鼻が長い」を表す英文としては、have を使った所有型の文(Type3)が、全体である「象」が先頭に来て日本語と同じ順という意味で、情報提示として優れ、構造が単に SVO 型で簡単であることから、頻度的には対応関係が成立する。

#### <withの働き：個と個、個と事態>

1章の問題提起のところで挙げた例文での with を理解するうえで、次の点が非常に重要であることを筆者はやっと最近気づくようになってきた。そのような with を含んだ文に関し、我々日本人にとって分かり難さの最大の原因は、with 句が事態全体に関係しているということである。個と個とが同伴、近接していることを表す with の用法には、日本語の「と」がぴったりと対応する。1章で取り上げているような例文では、「と」では日本語訳にならず、そのことが我々には難しい表現であると感じられるのであろう。考えてみれば、他の多くの前置詞では、前置詞句が、ある事態の中の個と関係する場合ばかりでなく、事態全体と関係する場合もあり、そのどちらの用法でも、対応する日本語表現が存在しているのである。

例として in を見ると、訳の1つである「～に」は個と個との関係を示すときにのみ使うことができる。個と事態との関係で

は、in が付いた個(体)の側の訳では「に」は無理であり、「で」などが使用される。In の場合には、このような明解な対応があるせいか、個と個、個と事態の両方の場合に日本人が苦勞することはない。それを確認する例文を次に挙げておく。

(33) a. He put his hand in his pocket. 個と個

b. 彼はポケットに手を入れた。

(34) a. He was killed in the war. 事態と個

b. 彼は戦争で死んだ。

他方、with の場合、それを助詞「と」に対応させて理解し、覚えることが日本人にとって普通に行われていることであろう。この「と」は、上で述べたように、個と個とが近接していることを示すときの助詞で、個と事態においては「〜と」では対応できず、「は」のような他の助詞が対応し、その結果、我々日本人が難しいと感じるものと思われる。Type1 では「は」、Type2 では「で」が with に対応していることが分かる。

まとめると、with が使われるのは

- ① 個と個との同伴、近接
- ② 個と事態との近接→個の事態への関与

の2つの場合があり、①の場合のみ「と」に対応させることができる。次に、in を使った文との比較に触れておこう。

(35) a. “Where do you have pain?” “I have a dull pain in my lower back, around here.”

b. 痛むのはどこですか。腰のこのあたりに鈍痛があります。

Trouble であれば“with A”、pain であれば“in B”となるが、この前置詞の差は何であろうか。A 全体に関係するときには with、はっきりと何かの内部に関係するというときには in という使い分けがあることが分かってくる。その意味で、with 以外の前置詞が明確な空間的意味を持っているのに反し、with の場合、Type1 では“関与”という程度のことしかその意味を記述できない。

Provide A with B も同じように見ることはできるのではなからうか。これは宮前の所有格上昇(raising)の結果と見ることはできない場合で、このとき、A と B とが個体どうしで結びついたり(with により)、A と B とが個と個で近接しており、with B が文副詞的ではなく、動詞句 provide A を修飾する副詞として働いていると理解することができる。Prevent A from B も同様の構成になっていることは明らかである。

逆に、with 句の文副詞的用法と同じで、そのために我々日本人にとって分かり辛いものになっている前置詞句は外にないのか、ということで他の前置詞の用法を振り返ってみると、次のようなものが思い出される。

(36) The canary died on me this morning.

(37) It's very kind of you to say so.

これらは、個の事態への関与を示していて、我々日本人には分かりにくい表現であると感じられるが、この場合も、前置詞句がその残りが表す事態を修飾する文副詞になっていることを理解すれば違和感は解消される。

### <トピック>

英語は、SVO 型を典型とする文型がしっかりした言語であるといえる。その意味は、動詞(V)が動作を表す場合、主語(S)はその動作主で目的語(O)が被動作主になっているということである。主語 S が原則的には文頭に来ているため、それが同時にトピックを担うということで、少なからずトピックを主語に一致させることが難しくなることが予想される(安井)。日本語の「は」は、主に文頭に置かれ、動作主に限らず、どんなものにも付けることができ、トピックを示す専用の助詞とみることができる。英語でトピックを示す表現方法として with 句を文末に付けて表現する場合、with 句は文末に来るので、トピックを示す位置としては不利になっていると言わざるを得ない。

日本語では、「〜は」の部分は、通常、文頭に来て、この部分が単に文副詞として働くのか、または英語のような主語として働くのかは文全体の意味に関係する。英語では、with 句は通常文末にくるが、この部分が文副詞かどうかは、そこまでの内容でほぼ決定される、ということが日本語と違うところである。英語では、一般に主語が同時にトピックを示すことから、その点で今考察している with 句とトピックに関し競合関係が生じる。主語が代名詞などの既知の項目になっている場合には、with 句は文全体のトピックになりにくくなっている。With 句は文末に来ているということで新情報を担うことはできても、トピックを担うことは難しいであろう。したがって日本語の「象は」とはその点が大きく異なっている。「象は鼻が長い」型は、Type1, Type4 と類似していると感じられるが、それは文頭の象がトピックであるからであり、そのことが、また、多く使われる根拠になっていると思われる。

日本語のタイプ1を見てみよう。

(38) 彼は行動が少しおかしい。

これに対し、構造を保持すれば、次のような英文になるがこれは非文である。

(39) \* Behavior is a little strange with him.

これはなぜだめなのか。それは、見てすぐに分かるように、冠詞類の用法に関係しているというのが(1つの)理由として浮かび上がってくる。このままでは、behavior と him とを結びつけることができない。His behavior などとすると、him がまだ出てない段階であり問題である(一般には例外的なものは存在する)。また、所有代名詞の付いた名詞が主語に来れば、多かれ少なかれ、それが文のトピックとして機能するようになりやすい。behavior の代わりに可算名詞の場合にも、やはり、定冠詞、所有代名詞などがその名詞に付加されることになる。その点から考えると、Type1 では、前文から継続している主語がトピックを示すということはない、ということが分かる。これは筆者にとって発見である。疑問詞や something, everything といったものは既知のものを指していないからである。したがって、Type1 の文は、発見的、突発的状況や突然の想起のような状況においてのみ使用されるのではないか、という推測が得られる。今認知したところである、ということの表出として Type1 が存在するのではないだろうか。

使用場から考え、Something is wrong with him などは、眼前の状況を述べる文(瞬間的発話)として使用されることが多いのではないか、ということであるが、全体の中で捉える余裕がない場合など、気になったところをまず先に述べ、それに関わる主体全体を with 句により、後でもって示すという手法になっている。それに対し、発話に十分時間的余裕があるような場合には、そのような構成をとる必要性がなくなり、典型的な英語の文として、トピックを主語に据えた形を採用するようになると考えられる。その結果、

(40) He had (showed) some strange behavior. 一時的 vs. 恒久的

(41) His behavior was (somewhat) strange.

などが使われるのではないか。それは考えてみると、日本語でも同じである。「どうしたんだ、彼は」のように語順倒置が起きることで分かるように、この思いが生じた時点やそれを想起した時点での感情的色彩が濃い表現であることが分かる。この点は、この章の最後のところで述べる疑問詞・不定代名詞制約と関係している。

したがって、What's the matter / with you. などの Type1 は、斜線のように区切られるが、今述べた意味で極めて自然な順ということが出来る。

<部分 vs. 全体>

英語において、主語に来るものとして主体全体とその一部のいずれをトピックに設定できるかをここで検討してみたい。英語で with を使った「象は鼻が長い」型の文が少ない理由は次のように考えられるのではなからうか。例えば英文

(42)\* nose is long with the elephant.

(43) A slight hope rose in John.

を見てみると、その理由が見えてくる。something などと違い、冠詞の問題が絡んでくるのである。所有者(主体)がまだ出ていない段階でその一部を示すことが英語では冠詞類の付加に絡んで難しい。この例では、nose は可算であり、冠詞類がどうしても必要である。a, the, its などどれもじっくりこない(この中では the がやや可能性としては高いように感じられるが)。日本語も、部分に関する陳述、次にその主体全体の提示というのは不可能ではない(「鼻が長い、象は」)が、日本語では主体全体を文頭に持ってくることができ、そのほうが自然な順である。したがってこのことは、全体・部分を1文で提示するとき、その提示順として全体を先に示すほうが無標であるという意味で、日英共通の部分・全体制約と名づけることができよう。この点から、(19a)の I を主語に据えた Type2 や、have を用いた Type3 の文を見直してみると、部分 vs. 全体の面で、主体全体が主語で先に来て、部分がその後に見え、制約に合致する構成(提示)順になっていることが分かる。(19a)の with my teeth は文のトピックではない。例えば、次の Type3 の英文は、以下のような特徴を持っている。

(44) The elephant has a long nose.

主体全体が主語になっていて、不特定のある long nose を所有していると述べ、その結果、部分 vs. 全体の関係が形成されるわけで、その点では自然な順序といえる。日本語の「象は鼻が長い」も自然であるが、日英語で発想は全く異なるものである。それと発想的に同じものが Type4 でもあり、その提示順には全く問題ない。次のような文は、視点の置き方が異なっている。

(45) a. The nose of the elephant is long.

b. 象の鼻は長い。

部分 vs. 全体の関係が a では「of」で、b では「の」により何れも名詞句の中で述べられ、その結果、象の一部である鼻がトピックになっているという特徴を持っていて、日英語で同じ文構造であり、ともに自然である。ただ、部分・全体から成る名詞句の中でも提示順として日英語で逆になっていて、全体、次に部分の順の日本語のほうが名詞句の中の問題

であるが、自然であるといえる。この文に続くものとして、“The elephant ...”とか、「象は...」とかでは視点の置き方に一貫性がなくなってしまうと考えられる。

<トピック + 部分 vs. 全体>

以上、トピックと部分 vs. 全体という 2 つの考察の視点を合わせて考えると、英語では have を使った文が多くなる必然性が理解できるようになる。英語の Type1 では、主体全体が文末に来て、日本語のタイプ1とはトピックが文末、文頭で異なり、それが英語の Type1 型の文の使用頻度を低くしていると考えられる。トピックの点と「全体、次に部分」という提示の順とを一気に解決してくれるのが have 型の文ということになる。また、Type4 の文もそうである。

(46) The elephant has a long nose.

(47) The elephant is long in its nose.

日本語では(46)の直訳で「持つ」を使った次の文が使われることは少ない。トピックの点でも、部分 vs. 全体の点でも問題ないのであるが。

(48) 象は長い鼻を持っている。

日本語では、この文型が使われる状況がかなり限られていることが分かる。すでに考察したように、日本語では主語が目的語で示す対象をコントロールすることが出来るかどうかは 1 つの使用上の制約になっていると思われる。「象は長い鼻を持っている」は、「象は鼻が長い」と情報量の点からは同じであり、それ故に、構文の競合が生じ、使用される場の棲み分けが出来ている、というのが筆者の現段階の考えである。(47)は日本語の「象は鼻が長い」の型そのものといえる。英語での(46)、(47)の使い分けについては、やはり棲み分けの問題であると考えられるが、筆者の今後の課題としたい。構文から生じる意味の違いがあると思われるが、それを述べることは現段階ではできない。ただし1ついえることは、in its nose の部分が、残りの部分の成立についての条件になっていることである。また、文脈が整っていれば、

(49) The elephant is long.

が単独で成立するが、そうでなければ(47)の途中段階の The elephant is long は緊張を生み出すものである。そのことが have 型の文と比べ、Type5 の使用範囲を狭めているのかもしれない。もちろん、象の特徴として long ということが非常に目立つこと、代表的な特徴ということであれば、in its nose が不要になり、このあたりのことが Type5 の使用に関係していると思われる。因みに、日本語の「は」が、英語のような主語を示すものでないことが、タイプ1、タイプ2型を見ると分かる。

以上から、トピック設定、部分 vs. 全体の提示順の2つの視点から、次のような対応が得られることがわかる。

タイプ1	-----	Type1 (Type2, Type4)
タイプ2	-----	Type2 (Type1, Type4)
タイプ3(まれ)	-----	Type3
タイプ5(後述)	-----	Type5 (後述)

この表から、Type1, Type2, Type4 が競合していることも分かるが、それらの使い分けの原理をある程度、上で明らかにすることができた。

<属格表現と所有格上昇>

すでに取り上げた型ではあるが、ここで改めて属格を使った文型について追加考察することにする。

タイプ5 (属格型)

(50) 象の鼻は長い。

Type5 (属格型)

(51) The nose of the elephant is long.

これらの属格を含む文では、象の鼻、The nose of the elephant 全体が、したがって、その中の中心である鼻、the nose がトピックになり、また、それが文を述べる視点になっていて、その主体である象はトピックになり難しく、鼻に着目して述べようとする文脈の中で使われることになる。例えば、これに続く文として、象全体をトピックにして述べることは苦しいであろう。この点が属格を含まない文と決定的に異なる点である。

Type1 の文に対して、次のような意味的に類似した文が考えられる。

(52) What's your matter?

(53) What's your problem?

(54) What's your trouble?

(55) あなたの問題は何ですか。

これらは日英語で互いに構造的に同等の文と考えられるが、日本語でも分かるように、目の前の異常な出来事を見て

驚いたときのような表現としては相応しくない。タイプ1や Type1 とは使用が競合すると考えられるが、現段階では筆者にはこれ以上のことは何も言えない。

宮前は、所有格上昇という視点から次の2文を関連させて扱っている。

(56) a. Tom's selfishness surprised Lisa.

b. Tom surprised Lisa with his selfishness.

b は、Type2 に似ているが with 句は Tom と意味的に結びついている。したがって、この場合、with 句は道具的解釈となる。この例では、with の目的語が表す対象が、主語 Tom の一部(属性)になっていて、その点では Type1 で挙げた例文とちょうど逆の形に近い。同じ形にすると、

(56) c. \* (His) selfishness surprised Lisa with Tom.

となるが、これはなぜ非文なるのか。先に述べた部分・全体制約に抵触していることと、さらに、動詞 surprise が使われると、主語の表す selfishness が具体的に誰のものか確定できないことが関係しているように思われる。日本語でも、他動詞文では所有代名詞などが必要であると感じられることと平行している。

(56) d. ? トムは、利己的などころが理沙を驚かせた

トムがトピックとして先に来て、その属性「利己的などころ」が(属格付きで)後に出てくる、

(57) トムは、利己的などころがあった。

と比べると、やはり、動詞の性格から非文になったり、正しい文になったりすることが分かる。それでは目的語(O)のところにも属格が含まれている場合はどうであろうか。

(58) a. I admire Tom's honesty.

b. I admire Tom for his honesty.

c. I admire the honesty in Tom.

これらは宮前で所有格上昇の1例として取り上げられている。この中で、(58c)の the honesty in Tom は全体が名詞句になっていて、この honesty は Tom の honesty という関係がこの名詞句の中で確定される。以上、surprise, admire の 2 種類の文を見ただけでも、属格付き名詞のところから分離できること、(c)の場合の適格性に差があること、前置詞が with や in などと異なることがあるなど、これらはすべて動詞の意味から来るものと考えられる。

次の2文を比較してみよう。

(59) She struck his head.

(60) She struck him on the head.

後者の場合、個と事態とが on で結合されていると見ることができる。なぜ、on the head の部分は his head であり、her head でなく、また、

(61) She struck him with a stone.

においては、she と with a stone とが結び付くというのは、やはり動詞の意味の特徴から来るものと考えられる。これまでの分析を踏襲すれば、構造的には on the head や with a stone は個と残りの部分が示す事態とがその中の前置詞 on や with で結合されていると考えることができる。そう考えると、on the head の中に the が使われるのも、それが his head を直接指しているのではなく、彼について、その中の部位という種別を表していることから生じるものという理解が得られる。これらの目的語の所有格上昇では、トピックではなく、陳述しようとしている動作を受ける対象の焦点化の違いが目的語の違いとして直接表に出てきているといえる。主語の位置での所有格上昇も焦点化の違いではあるが、必ずトピックの違いとしても現れるということが主語を特有なものにしている。

ここで興味あるのは、日本語で鼻のところだけを変化させた

(62) 象のどこかが長い。

(63) 象のどこが長い。

(64) 象はどこかが長い。

(65) 象はどこが長い。

(66) 象は長い何かを持っている。

などの表現が可能であるのに対し、英語では、それと同じように nose の部分だけを something, somewhere, what などに置き換えて表現することができない、ということが日英語の比較から気づかされる。Type2 から Type5 までの文についてそれらの語で置き換えようとしてみるとそのことが分かる。すると、Type1 が Type2 から Type5 までのそういった置き換えに相当する文になっているのではないかと、ということが分かる。つまり、筆者がこれまで気になってきた Type1 というのは、他の類似構文の中の名詞を不定代名詞、疑問詞などに置き換える際の構文として用意されている、と見る



こともできるという発見に到達することができた。

象のどこ

などが日本語で言えるのに対し、英語ではこの塊は作れないが、このことに Type1 の存在意義を認識するヒントが隠されているのではないか。このことを英語の疑問詞・不定代名詞制約と呼ぶことにする。

#### 参考文献

- 1) 安井 稔 「新しい聞き手の文法」 大修館書店 1978
- 2) 池上 嘉彦 「『する』と『なる』の言語学」 大修館書店 1981
- 3) 宮前 一廣 「前置詞の文法」 松柏社 1998
- 4) 河本 誠 「前置詞 with の同伴性について」 岡山理科大学紀要 第 37 号 B 2001

## ***With* phrase connecting an entity to an event**

Makoto KOMOTO

*Department of Socio-Information, Faculty of Informatics,*

*Okayama University of Science*

*1-1 Ridai-cho, Okayama 700-0005, Japan*

(Received October 2, 2006; accepted November 6, 2006)

I have dealt with the next sentence type *What's wrong with you?* in this paper in the light of its sentence structure and its meaning, comparing it with the corresponding Japanese construction. Through this consideration, I have found that there are two constraints working in constructing this kind of sentences. The first one is about the sequence order within a sentence of the whole entity and one of its parts. The second one is that we can't replace a noun with an indefinite pronoun or an interrogative as freely as in the Japanese language. These two constraints make us realize that the above example sentence is indeed unique in English. In the process of this investigation, I have come to understand that the preposition *with* can exhibit the connectedness of an entity to an event, as well as the connectedness of an entity to another entity.